



高校野球のマナーとルールを学ぼう (第39回)



一般財団法人兵庫県高等学校野球連盟

グラウンドでの試合を振り返り、高校野球の大切なマナーとルールを学びましょう。
あなたの「なぜ? どうして?」にわかりやすくお答えしていきます。

マナー編 開季に誓うフェアプレイ

今回のセンバツ大会開会式で、奥島日本高野連会長の「ルールを越えたフェアプレイ」の言葉が印象的でした。

春・夏の甲子園大会では、日本高野連会長が大会審判委員長を務めます。「対戦相手に尊敬の念を持ち、公正なプレイを心がけること」と激励した一節です。「プレイの上でのこと」では済まない、危険な行為が繰り返されたことへの痛切な思いが伝わりました。

アマチュア内規に、「ラフプレイの禁止」が明記されたのは昨(2013)年の開季でした。日本高野連はその後、各都道府県連盟と審判委員に、「守備妨害は絶対に許されない」と通知しています。追って、技術・振興委員長名で、「フェアプレイの精神とマナーの向上について」の文書を出して徹底を促しました。にもかかわらず、危険なプレイが繰り返され、秋の東北大会では、体当たりされた捕手が病院に運ばれる事態もあったのです。今年1月のセンバツ選考委員会では、危険防止ルールを適用された東北大会4強のチームは、補欠校から漏れました。また、中国大会準決勝で大敗したチームが、守備妨害のあったチームより上位に位置づけられています。模範試合の大会、その選考委員のマナー重視は当然、どんな時も「相手を傷つける行為」は絶対に許されるものではありません。選手生命を脅かす危険にプレイについては、アメリカ大リーグでも野球規則を試験的に改正するニュースが伝わっています。

高校野球では守備妨害・走塁妨害を問わず、特別規則などを設けて未然に危険防止を呼びかけて来ました。ここに来て、フェアプレイ精神を問われることは無念ですが、改めてスポーツマン・シップの根幹を問いながら、常に原点に立ち戻ることを忘れてはなりません。

ルール編 フォースプレイの確認／春の練習試合から

2死満塁、打者は1ボール2ストライクからワンバウンドの4球目を空振り、ボールは三塁側ベンチ方向へ転がりました。追いかけた捕手が三塁へ送球しようとしたのですが、三塁手はなぜか無関心。振り返って一塁へ送球したが間に合わず、「オールセーフ」になってしまいました。三塁手は思い違いをしたのか気がかりです。

試合後に監督から、「振り逃げの打者をアウトにするには一塁に投げんとあかんでしょ?」と質問がありました。

規則6・09は、打者が走者となる項目です。その(b)(2)に、「走者が一塁にいないとき、または走者が一塁にいても2死のとき、捕手が第三ストライクと宣告された投球を捕らえなかった場合。」とあります。

打者が走者となったために、塁上の走者は各々の塁の占有権を失った(フォース)状態になりました。次の塁か走者に触球すればアウトが成立します。上記では打者走者はもちろん、満塁の走者を誰でもアウトにする機会がありました。戸惑ったような三塁手、打者だけのアウトを問題視する監督には、規則の確認が不可欠です。認識不足が原因で、「やらずもがなの得点」を与えての敗戦はみじめでした。

